

アンデスにおけるサンティアゴ信仰の変容の一側面

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-04-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大原, 志麻 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00010043

アンデスにおけるサンティアゴ信仰の変容の一側面

大 原 志 麻

1. はじめに

サンティアゴは、世界遺産である巡礼地サンティアゴ・デ・コンポステーラに祀られている著名な聖人である。レコンキスタ期に騎士聖人としてのイメージが形成されたサンティアゴは、様々な戦地に現れたとされ、スペインの人の移動とともに各地で祀られるようになっていった。その信仰はヨーロッパのみならずラテンアメリカやアジアへ広まり、実に多様なかたちで受容されている。そのためサンティアゴ信仰は人気のある研究テーマであり、宗教学はもちろん、世俗的な政策としての巡礼路を扱う観光学、信仰の起源と形成に関する歴史学、図像やロマネスク建築と関連することから美術、パウロ・コエリョの『星の巡礼』以降の流れを追う文化の翻訳の側面に着目した文学研究、また特にメキシコでの文化人類学的なフィールドワークなど多岐に渡る。

サンティアゴ研究はインターディシプリンもしくはマルチディシプリンでなければアプローチできないとされているが、それはそれぞれの研究領域からの視座に限界があることを意味している。聖人による奇跡という性質上、所謂実証研究が困難であり、歴史学においてその研究のトピックスは限定されている。文化人類学における大きなテーマであるラテンアメリカのシンクレティズムにおいては、グアダルーペのマリアが圧倒的な重要性を持ち、サンティアゴは必ずしもメジャーな研究対象ではない。サンティアゴがラテンアメリカ各地でどのように在地の神々と習合したかについては研究が進められており非常に興味深い、歴史的経緯から断絶したかたちで個別に研究が進められている。また観光学も20世紀にスペインのマヌエル・フラガによって整備¹されて以降のサン

¹ サンティアゴ大聖堂ではフラガによるサンティアゴ・デ・コンポステーラの観光整備についての詳しい映像資料が流されている（2016年11月）。なお、2005年にガリシア自治州議会の議長選に国民党からの候補者として出馬したフラガは、ポンテベドラのカンガス・デ・モラソでの演説で「神

ティアゴ・デ・コンポステーラ巡礼を追うもので、サンティアゴ信仰の起源とは断絶した現代を視座としている。特に中世後期までにイベリア半島で形成されたサンティアゴ像のラテンアメリカにおける導入後の断絶性と連続性についてはまだ研究がほとんどなく、一定の概説の共有に留まっている。

サンティアゴ信仰は征服戦争の過程でコンキスタドーレスによりもたらされたとされているが、イベリア半島で形成されたサンティアゴ像とラテンアメリカでの信仰の実態は様相がかなり異なる。ヤッファのセベデオとサロメの子である十二使徒のサンティアゴは、イベリア半島ではイスラーム教徒殺しの騎士聖人だが（図1）、キューバでは黒人として描かれる²。ペルーでは現地の帽子を被って表象され、イスラーム教徒殺しではなく、インディオ殺しとして表され（図2）³（図3）⁴（図4）⁵、メキシコ革命ではサパタと結び付けられる⁶など、その奇跡も戦争に関わるものに留まらず多様であるが、イベリア半島で形成されたサンティアゴ像との断絶と連続性についての理解は曖昧なままとなっている。



（図1）サンティアゴ・デ・コンポステーラ大聖堂のサンティアゴ（2015年11月筆者撮影）



（図2）「スントゥルウワシでのサンティアゴの顕現」

と使徒サンティアゴが来る（6月）19日に多数派の支持を再び授けてくれるように」とその加護を求めている。http://elpais.com/diario/2005/06/11/espana/1118440811_850215.html

² Javier Domínguez-García, “La distopía de un mundo al revés en El camino de Santiago de Alejo Carpentier”, *Espéculo. Revista de estudios literarios* (Universidad Complutense de Madrid), 2007. http://www.ucm.es/info/especulo/numero34/distopia.html

³ Anónimo, “Aparición de Santiago en el Surturhuasi”, *Pintura colonial cusqueña. El Esplendor del Arte en los Andes*, Haynanka Cusco, 2015, p.178. ペルーへの征服戦争をモチーフに18世紀に描かれたものの。

⁴ *La Catedral del Cusco y la Iglesia de la Compañía de Jesús*, Cusco, 2015, p.17. 聖ヤコブは、マンコ・インカとインディオの抵抗に対する戦いにおいてスペイン人を救うために天から降下した奇跡により1651年にクスコ市の守護聖人となった。

⁵ *La Catedral del Cusco y la Iglesia de la Compañía de Jesús*, Ibid, p.34.

⁶ Aracelo Campos Moreno, *Lo que de Santiago se sigue contando. Leyendas del apóstol Santiago en México*, Jalisco, 2007, p.99.



(図3) クスコ大聖堂のサンティアゴの祭壇 (図4) クスコ大聖堂内のサンティアゴ像

ピーター・パークは『文化のハイブリディティ』における数ある対象地域の中でもとりわけラテンアメリカは異種混淆的な地域そのものであり、ラテンアメリカ文化＝ハイブリディティであるので、歴史学の立場から異なる地域間の差異をかすませることなく、距離をおいて回析現象を分析するべきであるとしている。また、ポストコロニアル研究でも、独立後の個々の社会や民族や文化の個性だけでなく、連続性、交雑性を勘案し、どこまで西洋の規範に寄りかかっているのかの範囲を確定するべきであるとされている。文化的残滓の恣意的な利用や歴史的連続の創造虚構の混交性には、スペイン人のもとに到来した／スペイン人が創造したサンティアゴ神話も含まれているとテーマまでは設定されているが⁷、依然多くのニュアンスや曖昧さがサンティアゴのアダプテーションについては課題として残っている。

サンティアゴはスペインで形成された独特の崇敬のかたちをもっており、それがどのようにコンキスタドーレスによってアメリカに導入され、その後拡大されたかは、スペインとラテンアメリカという異なる研究地域を対象とすることになり、研究の分断から架橋が困難である。しかしサンティアゴの変容に着目した研究は、植民地化された空間の検証となる。本稿では、スペインで形成されたサンティアゴ像とペルー及びボリビアといった旧ペルー副王領において

⁷ 大橋洋一「サンティアゴの変容」『差異と同一化 ポストコロニアル文学論』研究社、1997年、49－64頁。

収集した図像資料や儀礼の事例を比較し、サンティアゴ信仰の導入の在り方について考察し、ピサロによる導入とアンデスの植民地化におけるサンティアゴ巡礼の広がりについて理解する上での一助としたい。

2. 旧ペルー副王領におけるサンティアゴ信仰

サンティアゴ崇敬はコルテスとピサロによって導入されたとされ、メキシコとペルーの広大な大地にその信仰を広めていった。12, 3 世紀にその崇敬の盛期を迎えたサンティアゴであるが、15世紀末にはレコンキスタの終了と、コロンブスによる「新大陸発見」によりサンティアゴ・デ・コンポステーラが西の果てでなくなったことから、衰退していった。しかしコンキスタドーレスたちによる征服戦争の正当化という新たな政治的局面に際し、またコンキスタドーレス間の内紛から、より神の加護がある方が正当であるという認識により、16世紀の征服戦争の中でサンティアゴに再び焦点があたることとなる。同世紀にはインディオのキリスト教への改宗は開発と同義となり、布教の目的はエンコミエンダの拡大と直結していった。サンティアゴがラテンアメリカへと向かう思想的背景については、昨年度のアラカズ大学での在外研修でフランシスコ・カステージャ・ウルバノ歴史思想学科長(図5)に大いに示唆を頂いたので、こちらについては別稿にまとめたいと思う。



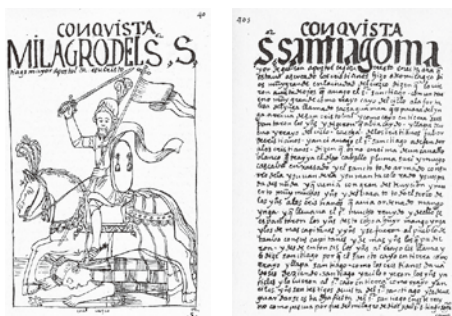
図5 フランシスコ・カステージャ・ウルバノ教授と筆者

サンティアゴは征服戦争そしてスペイン人間の各党派の正当化の道具立ての一つとして征服期に用いられ、ペルーにはフランシスコ・ピサロが取り入れたとされている。



『新大陸自然文化史』の中で、ホセ・デ・アコスタは「多くの人の報告書と、歴史書にあるように、ヌエバ・エスパニャでもビルーでも、エスパニャ人の行ったいろいろな戦争で、敵のインディオが、白馬に乗って剣を手にし、エスパニャ人のために戦う一人の騎士を、空の上に見ていることが確かに知られている。そこで、むかしも今も新大陸全体で、輝かしい使徒サンティアゴは、非常な尊敬を受けている¹⁸⁾と記述している。

特に1536年のクスコ包囲戦の勝利におけるサンティアゴの顕現についての、フェリペ・グアマン・ボマ・デ・アヤラの『新しい記録と良き統治』における記述はよく知られている。ボマ・デ・アヤラ（1534?－1615年）は、ワヌコ地方の王族の子孫を自称するインディオで、キリスト教徒となり、スペイン語を習得し、1613年頃『新しい記録と良き統治』を著した。同書は1179頁に及ぶ大著で、そのうち465頁が筆者自身による挿絵で構成され、インカ時代や征服、そして植民時時代の政治、社会、文化について記された貴重な資料で、アンデス研究者によってしばしば引用されてきた。その中でもクスコの包囲戦のサクサワマン砦の攻防におけるサンティアゴの顕現は、必ず引用される箇所である。



⁸ 齋藤晃『魂の征服 アンデスにおける改宗の政治学』平凡社、1993年、166頁に引用。

⁹ Poma de Avala, G.F., *Nueva Cronica y Buen Gobierno*, Paris, 1936, p. 404.

「キリストの使徒であるガリシアの大ヤコブは、この時キリスト教徒に近づき、クスコの街でいとも偉大な神の奇跡を行った。天からの稲妻がサクサワマン（図8）と呼ばれる、サン・クリストバルの上にあるインカの砦であるインカの要塞に落ちた。そして地にも雷が落ちたので、インディオたちは驚かされた…、そしてそのようにセニョール・サンティアゴがキリスト教徒を庇護するために降臨したのだといった。白馬に跨り、旗を持ち、色鮮やかなマントと裸剣で完全武装して、大いなる破壊と多数のインディオの死に顕現し、そして聖人は大きな音を出し、インディオを驚かしてマンコ・インカが命じたキリスト教徒に対するインディオの包囲を打ち壊した。その時からインディオはサンティアゴを雷と呼ぶようになった¹⁰」。



図8 現在のサクサワマン（2016年9月筆者撮影）

また、ゴンサロ・ピサロに全軍の総帥を命じられたカルバハルは聖母マリアもしくはサンティアゴの像や、聖なる心臓、ゴンサロ・ピサロの頭文字G.Pを描かせたり縫い込んだりしたものを身につけた¹¹。

先の文章において、稲妻と共に現れる「ボアゲルネス（雷の子）」サンティアゴとインカ帝国第三位の神格であり軍事的性格を帯びていた雷神イリャパの融和は周知のことで、カトリカ大学でスマラビア教授からも詳しくご教示頂いた。しかし、その融和の過程については明らかになっていない¹²。

¹⁰ Poma de Ayala, G.F., *Ibid*, p. 420.

¹¹ Poma de Ayala, G.F., *Ibid*, p. 404.

¹² Domínguez García, J., *De apóstol matamoros a Yllapa mataindios. Dogmas e ideologías medievales en el (des)cubrimiento de América*, Universidad de Salamanca, 2008, p. 100.



図9 ペルー・カトリカ大学でスマラビア教授、レオン博士と

コンキスタにおけるサンティアゴは、神学的政策によって、そしてスペインでは時代遅れになっていたレコンキスタ期の思想と理論的枠組みを用いて、外部への武力による侵略を正当化しそれと並行して想像の空間のコンキスタを行っていったのである。サンティアゴを用いた劇場的な空間は、イベリア半島の外にアレゴリーの構造を広めていったが、現在の受容などのようなものなのかを下に紹介したい。

3. アンデスにおけるサンティアゴ信仰の一例

アンデスでのサンティアゴについてのフィールドワークは、巡礼路のあるポトシで行うのが理想的であろう。2016年度の在外研修中にアルカラ大学のテレサ・セニエド＝アルグエジェス先生にアンデス高地ポトシの過酷なインディオの状況や信仰の習合について多くをご教示頂いたので、当初ポトシにも赴くつもりであったのだが、それまでの高地での出張中の体調から標高4070mの都市で調査するのは体力的にもたないと判断し、ポトシから遠くないウユニでのサンティアゴ信仰について見てみることにした。早速カーステレオから、ペルーとボリビアで活躍するアレキパで結成されたグループVirus de Amorの“Mirame a la cara”が流れ出し、現地の人々はその歌詞にある“¡Santiago!”の掛け声とともに、一緒に歌っていた。

そしてウユニのカテドラルで助祭をされているゴンサロ・ベンゴレア氏に話を伺った。ベンゴレア氏によると当地におけるサンティアゴに求める加護の内容は四つあるとのこと、一つ目は稲妻、二つ目正義を行使するための奇跡、三つめは復讐と懲罰、四つ目は強い治癒力である。



図10 ゴンサロ・ベンゴレア助祭とウユニのカテドラルに収蔵されているサンティアゴ像

ベンゴレア助祭によるとウユニにはカテドラルから特別の許可をもらってサンティアゴの礼拝堂を設置した個人の家が5つもあるそうで、そのうちただ一つ公開されているボンボリ礼拝堂に案内された。



図11 ボンボリ礼拝堂 (2016年9月筆者撮影)



図12
ポトシのボンボリ礼拝堂の
サンティアゴ

ボンボリ礼拝堂はポトシのサンティアゴを祀ったボンボリ礼拝堂の分祀のようなものであるようである。このようにサンティアゴの礼拝堂を自宅に設置するのはウユニの習慣にはなく、案内してくれたドニャ・ビッキーの家族は北からやってきたので、その慣習を守っているようである。ボンボリの集落は、ポトシから5 kmのチャジャパタ街道にあるクルセ・マチャ共同体にあり、毎年ボリビア各地から、12000～15000人が訪れるようである。父なる(Tata)サンティアゴがいつボンボリに来たのかは誰も知らないが、1826年のボリビア独立の際に逃げ込んだスペイン人がコロニアル風の礼拝堂を建てたのが始まりだといわれている。そこでは7月下旬と11月末にサンティアゴの祭りが祝われる。

今回は特別にサンティアゴへの礼拝の仕方を見せてもらったが、サンティアゴの礼拝はパチャママとは準備するものが異なるようで、指示されたお店で蠟

燭とワインとコカの葉を購入した（図13）。



図13 2016年9月筆者撮影

そして祭壇（図14）に蠟燭とワイン、コカの袋を奉納した。蠟燭は灯し、ワインは少量を祭壇前に注いで奉じたが、コカについては袋を奉納するのに加えて、そこから取り出したコカを両手で三回捧げ、口に入れて三回噛んだ。このように行為が三回反復されることは多い。祭壇にいるサンティアゴは、カテドラルの像とは異なり、剥き出しの剣も、白馬にも乗っておらず、牛追い風の帽子と大きなマントが特徴である。



図14 ボンボリ礼拝堂の内部

祈りの言葉には「サンティアゴよ、そのマントで災いから守り給え」というものがあり、スペインとメキシコとは異なる。このマントで守られることによって起きた奇跡は数知れず、特にドニャ・ビッキーの印象に残っているのは、サンティアゴの祝祭にほど近い7月11日に妹のバスが正面衝突したが「マントで守ってもらったお陰で」軽傷で済んだそうである。

毎年サンティアゴの祝日である7月25日の2か月前にあたる5月から祝祭の準備をはじめ、5月1日にはキリストに準えられた牡羊を屠り、12使徒に合わせて12枚の皿で午後12時に食する。トウモロコシやじゃがいものスープも塩で味付けされず、「おいしいものではないけれど」食べるのだそうである。

おわりに

本稿は、2015年から2016年にかけてのアルカラ大学での在外研修及び基盤研究（B）「ポストメディア時代の翻訳論」（研究代表者今野喜和人）の助成によるフィールドワークの紹介である。スペインでの在外研修では、アルカラ大学のスペインとラテンアメリカの思想研究を架橋する切り口としてサンティアゴを用いる手法で研究を進め、またサンティアゴ・デ・コンポステーラにも赴き、スペインにおけるサンティアゴ像の形成についての理解を深めた。そしてラテンアメリカに移入されたサンティアゴ像については、メキシコに引き続きペルーとボリビアに赴き、カトリカ大学のご協力を得ながら調査をした。印象としては、齋藤晃氏が既に述べている通り「サンティアゴは「ボアゲルネス」というあだ名によっても、スペイン人の子供の表現によっても、火縄銃を介した連想によっても雷に結びつき、それゆえ雷神イリャパにも結びつく。しかしながら、こうした外面的類似ゆえに使徒サンティアゴは雷神イリャパと習合したと言ってみたとところで、何も理解したことにはならないだろう」¹³。イリャパとの融和の起源はわからず、スペインで形成されたサンティアゴ像との連続性も不確かである。ボリビアのカテドラルのサンティアゴ像や助祭から頂いたサンティアゴのフィギュアには剥き出しの剣を掲げ白馬に跨る構図となっているが、ボンボリ礼拝堂のサンティアゴにはそれらは見られず、共通するのは大きなマントと牛追い風の帽子である。ポトシではサンティアゴ崇敬が盛んであるが、サンティアゴのポトシへの導入は独立で逃げ込んだスペイン人によるものとされており、コンキスタドーレスが導入したサンティアゴとイリャパの融和かどうかはわからない。植民地教会による弾圧の結果「スペイン人のイリャパ」は、キリスト教の神々に対抗する中で、インディオが異教の慣行を公然と表出させた独特の崇敬を形作ったため、スペインのサンティアゴとイリャパの間にはやはり大きな差異があるように思われる。今後の研究では、これまでの一般的な理解から、さらにサンティアゴの変容の流れを追っていきたい。

¹³ 齋藤晃『魂の征服 アンデスにおける改宗の政治学』平凡社、1993年、175頁。